

スキーマウンテイング

▽朝明アルパインクラブ

小寺 教夫

KODERA NORIO



フランスの雪景色を背に写る小寺選手。世界中の絶景を眼前にしながら競技に取り組めることもスキーマウンテイングの醍醐味。

鈴鹿の山から世界の山へ

鈴鹿山脈でトレイルランニングを重ね、雪深いヨーロッパの山々に挑む。険しい雪山を上り、そして下る「スキーマウンテイング」という過酷な競技で世界各地の大会に挑戦する小寺選手の姿を追いました。

栄光の瞬間
スポーツで輝く



夫

ISMF スキーマウンテイング 日本代表

PROFILE ▶小寺教夫
いなべ市在住。菰野町に拠点を持つ朝明アルパインクラブ、三重県山岳・スポーツクライミング連盟所属。45歳。身長178cm、体重63kg。2007年、菰野町役場に入庁し、社会教育課、水道課などを経験。20代後半から自然の山を滑るバックカントリースキーをはじめ、34歳で競技スキーの大会へ初出場。競技に専念するため2017年、菰野町役場を退職。スキーマウンテイングで2018-2019シーズンにアジア人初のワールドカップ全戦出場、年間総合ランキングで自身最高の26位を獲得。2019年、2021年、2023年に世界選手権日本代表に選出、2025年にスイスで開催される世界選手権に日本代表として4回目の選出、出場予定。

降り積もった雪山をスキーで駆けけるスキーマウンテイング、通称「スキーマ」という競技を皆さんは知っていますか。スキーマは、雪山のトレイルランニングともいわれ、スキーで山上から滑り降りるだけでなく、スキーで斜面を登り、急斜面や岩場などではスキーを外してザックに取り付け、ブーツ歩行で通過し、雪山の道なき道を走り続けてゴールを目指す競技です。そんな過酷な競技に30代半ばから取り組みはじめ、40歳を過ぎても世界選手権に日本代表選手として挑戦し続ける小寺選手。鈴鹿山脈の御在所岳や竜ヶ岳などを主なトレイルランニング場とし、夏も冬も山々の中で自身を鍛え、高みを目指しています。

雪上のトレイルランニング



スキーマ黎明期に見る景色

10年間勤めた菰野町役場を退職し、公務員という立場を捨てて37歳で競技者としての選択をした小寺選手ですが、メジャーなスポーツとはいえないスキーマという競技に取り組むことは不安も多かったといいます。それでも自分の力を信じ、幾度となく海外遠征などを続け、2018年〜2019年のシーズンではアジア人として初めてとなるワールドカップ全戦に出場し、短距離で競い合う「スプリント」という種目で世界6位、年間総合ランキングでも自身最高の26位を獲得するなど実績を残します。2019年から世界選手権の日本代表にも3回連続で選出され、日本におけるスキーマ競技の第一人者となっています。



▲かつての職場仲間でもある諸岡町長のもとへ訪れた小寺選手

「競技のレベルが成熟する前の黎明期にしかないチャンスを得て、アジア人として誰も見たことがない景色を初めて見ることができた」と小寺選手はこれまでを振り返ります。

目指すは冬季五輪への出場

競技で使用されるスキーマウンテイングのスキー板の半分ほどの重量しかない、板、ブーツ、金具などを

小寺選手 コメント



自宅から見える山並みの中でトレーニングを行い、世界を目指す決めて競技に取り組んでいます。御在所岳をトレイルランニングで走って登ったりと、雪がなくても地元の山でできる練習と環境があるので、ウィンタースポーツは雪国のためだけのものではないと実証するためにも冬季五輪の出場に向けて集中しています。そして、いずれはヨーロッパで楽しんでいるように滑るだけでなく、スキーで歩くことで得られる爽快感や雪山の楽しみ方などを多くの方に伝えられるような活動に繋がってほしいと考えています。

全て含めても片足約1.5秒で徹底的に軽量化されています。登りではスキーにシールと呼ばれる滑り止めをつけて登高し、下りはそのシールを外してブーツの踵を板に固定し、時には時速100キロを超える速さで滑降します。「スキーマはスキー競技の中でも何でもあるの種目。人工物など一切ない景色に触れた時は、競技中であっても見惚れてしまうほど」と小寺選手は語ります。日本選手権には200人ほどしか出場しませんが、ヨーロッパの大会では1000人以上で競い合うといい、その活躍の舞台のほとんどはヨーロッパの山々です。「イタリアやノルウェーの山は本当に美しい。そん



▲フランス・ティエヌユでの岩場を背に滑る
▶鈴鹿山脈、御在所岳でのトレーニング



な素晴らしい景色を競技で味わえることもスキーマの魅力のひとつです。現在の一番の目標は、新種目として初めてスキーマを取り入れられる2026年にミラノ・コルティナダナンペッツォで開催される冬季オリンピック出場。小寺選手は雪が少なく練習には不向きとされる中、地元の鈴鹿山脈でのトレイルランニングに拘り、夏はローラースキーでのトレーニングなどに励んでいます。小寺選手の合言葉は「鈴鹿の山から世界の山へ」。鈴鹿山脈が生んだ遅咲きのアスリートは、さらなる高みを目指して鈴鹿の山から世界の頂へ登り詰めようとしています。



イタリアのグレンデではない道なき道を駆け下りる。大自然を心の底から感じられる爽快感があるという。

撮影 Thomas Koller